

令和5年度あきた型学校評価

| | |
|------|------|
| 評価領域 | 学習指導 |
|------|------|

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 重点目標 | 教師による子どもの「見取り」に焦点をあてた、「主体的に学びに向かう姿」を育てる授業づくりの実践 | P | | |
| 現 状 | <ul style="list-style-type: none"> ・昨年度までの研究実践により、単元構想シートを活用した授業づくりに取り組んでいる。 ・授業づくりのために、教師の見取る力の向上、見取る視点や職員間の共有の工夫が必要である。 | | | |
| 具体的な目標 | <ul style="list-style-type: none"> ・教師の見取る力の向上 ・「見取り」からのフィードバックによる授業改善 ・児童生徒個々の「主体的に学びに向かう姿」を明らかにした授業作り | | | |
| 目標達成のための方策 | <ul style="list-style-type: none"> ・教職員対象のワークショップや学校支援講座の実施 ・「見取り」に焦点を当てた授業研究会等の実施 ・「主体的に学びに向かう姿」を明記した学習指導案の作成 | | | |
| 具体的な取組状況 | <ul style="list-style-type: none"> ・他学部の教員でも児童生徒の「見取り」ができる授業研究会等の工夫 ・児童生徒一人一人の「主体的に学びに向かう姿」の設定と授業後の見直し | D | | |
| 達成状況 | <ul style="list-style-type: none"> ・事前授業を参観できる「ふらっと授業参観」や参加人数を絞った全校授業研究会、「見取り」のワークショップを実施した。 ・職員に「授業場面で見取りができたか」「見取りを元に授業研究会に参加できたか」という項目でアンケートを実施し、9月と12月を比較すると、共に平均値が上がった。 ・児童生徒一人一人の「主体的に学びに向かう姿」から各学部のめざす「主体的に学びに向かう姿」の傾向が分かり、授業づくりのポイントが明らかとなった。 | | | |
| 自己評価 | <table border="1" style="width: 100%;"> <tr> <td style="text-align: center; width: 10%;">A</td> <td> <ul style="list-style-type: none"> ・「ふらっと授業参観」「授業研究会」「事後研究会」の流れが定着し、教師の児童生徒の見取り方の向上が見られた。 ・一人一人の「主体的に学びに向かう姿」を目指した授業づくりや各学部の「授業づくりのポイント」に基づいた授業改善が実施できた。 </td> </tr> </table> | A | <ul style="list-style-type: none"> ・「ふらっと授業参観」「授業研究会」「事後研究会」の流れが定着し、教師の児童生徒の見取り方の向上が見られた。 ・一人一人の「主体的に学びに向かう姿」を目指した授業づくりや各学部の「授業づくりのポイント」に基づいた授業改善が実施できた。 | C |
| A | <ul style="list-style-type: none"> ・「ふらっと授業参観」「授業研究会」「事後研究会」の流れが定着し、教師の児童生徒の見取り方の向上が見られた。 ・一人一人の「主体的に学びに向かう姿」を目指した授業づくりや各学部の「授業づくりのポイント」に基づいた授業改善が実施できた。 | | | |
| ↑ 評価基準 ↓ A：具体的な活動がなされ目標を達成できた B：具体的な活動はなされているが、目標は達成できていない C：具体的な活動がなされておらず、目標も達成できていない | | | | |
| 学校関係者評価と意見 | <table border="1" style="width: 100%;"> <tr> <td style="text-align: center; width: 10%;">A</td> <td> <ul style="list-style-type: none"> ・それぞれの子どもの実態に応じた指導を行っている。実生活につながる指導を続けてほしい。 ・複数のコミュニケーションツールをもてるとよい。タブレット端末等のICTの活用をもっと進めてほしい。 ・内面の見取りは、子どもが「貢献したい」「仲良くしたい」という思いがあると信じて見取ることが大切である。 </td> </tr> </table> | A | <ul style="list-style-type: none"> ・それぞれの子どもの実態に応じた指導を行っている。実生活につながる指導を続けてほしい。 ・複数のコミュニケーションツールをもてるとよい。タブレット端末等のICTの活用をもっと進めてほしい。 ・内面の見取りは、子どもが「貢献したい」「仲良くしたい」という思いがあると信じて見取ることが大切である。 | C |
| A | <ul style="list-style-type: none"> ・それぞれの子どもの実態に応じた指導を行っている。実生活につながる指導を続けてほしい。 ・複数のコミュニケーションツールをもてるとよい。タブレット端末等のICTの活用をもっと進めてほしい。 ・内面の見取りは、子どもが「貢献したい」「仲良くしたい」という思いがあると信じて見取ることが大切である。 | | | |
| 自己評価及び学校関係者評価に基づいた改善策 | <ul style="list-style-type: none"> ・的確な実態把握と年間指導計画に基づいた「主体的な学び」のある授業づくりを行う。 ・単元構想段階からチームで授業づくりを行う体制を構築する。 ・授業改善後の取組の共通理解と評価を継続して実施する。 | A | | |

| | | | |
|-----------------------|---|--|---|
| 重点目標 | 交流及び共同学習を計画的、組織的、継続的に行うことを通して、共に学び合う環境を整え、児童生徒の社会性の伸長を図る。 | | P |
| 現 状 | <ul style="list-style-type: none"> ・新型コロナウイルス感染予防のため、近年は直接交流は控える傾向にあった。 ・令和4年度の小・中学部の居住地校交流実施率は31.2%であった。 ・昨年度末実施の保護者アンケートでは、「交流の充実」が2.7ポイント、「地域への情報発信」が3.0ポイントと高くない傾向にあり、「交流の充実」では約16%が「分からない」と回答している。 | | |
| 具体的な目標 | <ul style="list-style-type: none"> ・居住地校交流を希望する児童生徒全員の円滑な実施のための体制をつくる。 ・保護者アンケートの「交流の充実」を3ポイント以上に、「地域への情報発信」は昨年度よりポイントを上げる。 | | |
| 目標達成のための方策 | <ul style="list-style-type: none"> ・居住地校交流の一連の手続き等を表にまとめて担任に提示する。 ・交流及び共同学習と併せて、障害理解授業や巡回学校展を実施する。 ・地域支援部通信での地域への情報発信の他、保護者への情報提供を行う。 | | |
| 具体的な取組状況 | <ul style="list-style-type: none"> ・交流の流れに従って、主として担任が打合せや文書作成を行った。 ・障害理解授業は4校、学校展は6校で実施した。 ・ホームページにリンクできる二次元コード付きの通信を保護者向けに発行した。 | | D |
| 達成状況 | <ul style="list-style-type: none"> ・居住地校交流実施率は43.7%であった。小学部では2校と学校間交流を実施した。 ・創立20周年記念式典では近隣の町内会長等74名の来賓に参列していただき、児童生徒の発表等を参観していただく機会となった。 ・今年度末実施の保護者アンケートでは、「交流の充実」が3.1ポイント、「地域への情報発信」が3.2ポイントに上がった。「交流の充実」の「分からない」の回答は約9%に減った。 | | |
| 自己評価 | A | <ul style="list-style-type: none"> ・担任を主とした居住地校交流実施の体制が定着した。 ・交流及び共同学習や地域での学習について保護者への情報提供ができた。 | C |
| | ↑ 評価基準 ↓ | <p>A：具体的な活動がなされ目標を達成できた</p> <p>B：具体的な活動はなされているが、目標は達成できていない</p> <p>C：具体的な活動がなされておらず、目標も達成できていない</p> | |
| 学校関係者評価と意見 | A | <ul style="list-style-type: none"> ・居住地校交流の取組が素晴らしい。保護者への発信の工夫も見られる。 ・子どもたちの成長を感じた。本物の体験、質の高い体験をすることの成果は大きい。地域に出向いて直接評価をもらえる機会を増やすとよい。 | C |
| 自己評価及び学校関係者評価に基づいた改善策 | <ul style="list-style-type: none"> ・年間指導計画に基づき、児童生徒主体の地域での学習を計画的、積極的に実施する。体験に終わらず、地域貢献につなげる。 ・地域の小・中・高等学校等と連携した心のバリアフリー授業（障害理解授業）やボランティア講座を実施し、地域に情報発信する。 | | A |

